

西都市教育研究センター

I	研究主題	・・・・・・・・	10-1
II	主題設定の理由		
III	研究目標		
IV	研究全体構想		
V	研究内容	・・・・・・・・	10-2
1	さいと学研究班		
(1)	さいと学三年間の取組評価		
(2)	デジタルコンテンツの充実	・・・・・・・・	10-3
2	英語教育研究班	・・・・・・・・	10-5
(1)	英語教育の充実と組織間の連携・強化		
(2)	授業改善と授業力向上		
(3)	小学校英語教育のカリキュラムの見直し	・・・・・・・・	10-7
(4)	授業以外における英語教育の充実		
3	学力向上研究班	・・・・・・・・	10-8
(1)	Web 学習単元評価システムと連動した取組		
(2)	漢字指導のための教材開発	・・・・・・・・	10-9
VI	成果と課題	・・・・・・・・	10-10
1	成果		
2	課題		
○	研究同人		

I 研究主題

『教育ブランド西都』の具現化を目指して
～西都市の子どもたちの可能性を広げるために～

II 主題設定の理由

本市は、すべての小中学校が教育課程特例校の認定を受け、平成21年度より『教育ブランド西都』の創造をキャッチフレーズに、市内二校の県立高等学校とも連携し、全市を挙げて小中高一貫教育に取り組んでいる。本センターもその一翼を担い、『教育ブランド西都』の具現化に向け、一貫教育作業部会や市教科等研究会等と連携を図りながら、日々研究実践に取り組んでいるところである。

本市が一貫教育を推進している背景の一つに、児童生徒数の減少による学校の小規模化が挙げられる。この傾向は今後も続く見通しであることから、地域に根差した特色ある学校づくりを推進する上でも、小・中・高等学校間の連携をより一層強固にしていく必要がある。

また、本市の一貫教育は、国際理解教育を基盤に「郷土に対する誇りと国際感覚にあふれ、新たな時代を切り拓いていく気概をもった子どもの育成」を目指しており、その具現化に向けては、小・中・高等学校を連続した期間ととらえた一貫性のある教育が望まれる。

これまでに、教員の相互乗り入れ授業や交流学习等、様々な形で異校種間の連携が実現しており、学校間の意思の疎通や課題意識の共有化が図られるなどの成果を挙げてきたが、同時に異校種間で連携を図る上での課題も明らかになってきた。

そこで、本センターでは、一貫教育の取組が三年目を迎えた本年度を“検証の年”と位置付け、以下の三つの視点から研究実践に取り組むことで『教育ブランド西都』の具現化を目指そうと考え、本主題を設定した。

－研究の視点①－

文化遺産等の豊富な教育資源を有する西都市のよさに気付き、語る活動を取り入れた「さいと学」を通して、ふるさと西都を愛する児童生徒を育成する。

－研究の視点②－

小学校1年生から導入している連続性、一貫性を重視した英語教育を通して、国際人として活躍できる児童生徒を育成する。

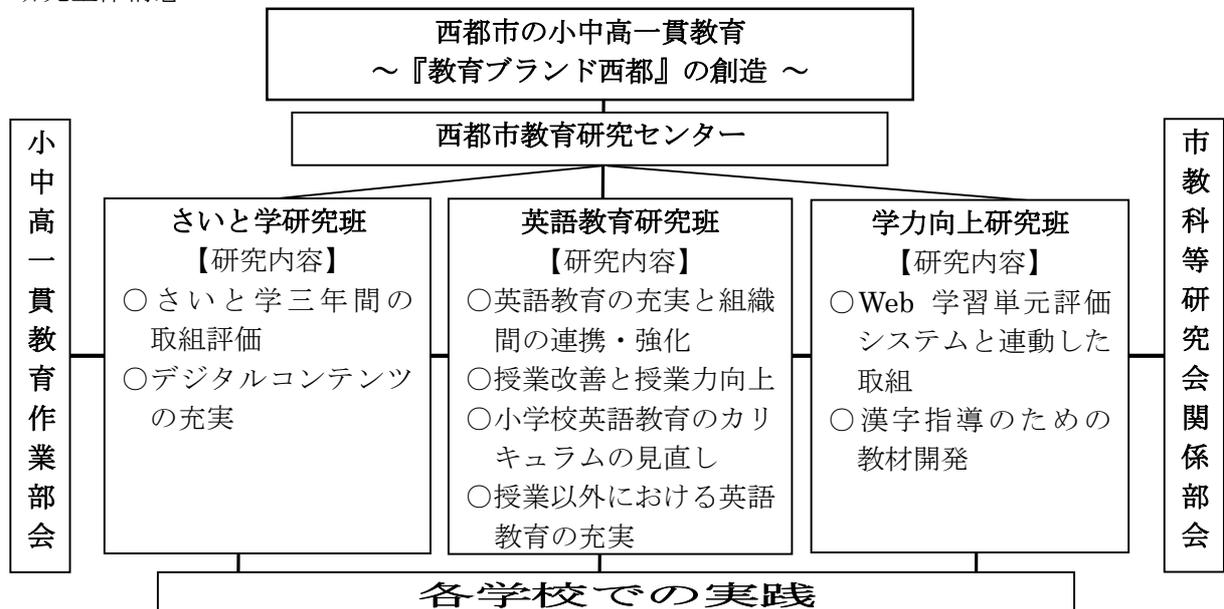
－研究の視点③－

視点①、視点②の基盤となる確かな学力を身に付けさせる。

III 研究目標

- 「さいと学」のこれまでの取組が児童生徒の郷土への思いにどのような変容をもたらしているのか検証するとともに、デジタルコンテンツの開発、活用をより一層図っていくことにより、ふるさと西都を愛する児童生徒の育成を目指す。
- 英語教育の充実に向けた組織間の連携強化を図るとともに、学習内容や指導方法、評価の在り方等について工夫改善することにより、国際人として活躍できる児童生徒の育成を目指す。
- Web 学習単元評価システムと連動した西都独自の問題の作成・活用により、ふるさと西都を愛し、国際人として活躍するために必要となる確かな学力の定着を目指す。

IV 研究全体構想



V 研究内容

1 さいと学研究班

(1) さいと学三年間の取組評価

ア 意識調査の目的・方法・実施

西都の子どもたちを西都で育てる西都独自の「教育ブランド西都」の具現化に向け、さいと学のこれまでの取組が児童生徒の郷土への思いにどのような変容をもたらしているか、意識調査を実施することで、これまでの取組について検証を行った。

意識調査は、【表1】の形式で実施した。これには二つの目的がある。一つは、さいと学の取組が郷土を愛する子どもたちを育てることにつながっているかを評価すること。もう一つはさいと学の学習の流れ【表2】の妥当性についての評価である。

【表1】意識調査内容

	とても思う	思う	思わない	全然思わない
西都市のことを知っている				
西都市のことを人に説明できる				
西都市のことが大切である				
西都市のために何か役に立ちたい				

調査方法についても二つの調査を行った。一つは、平成19年度、さいと学が実施される以前の抽

【表2】さいと学 学習の流れ

出校児童生徒の意識との比較調査である。もう一つは、

	① つかむ	②ふかめる	③まとめる	④ひろげる
教師が知識を触媒として与え、知的好奇心を刺激する「知る」段階①	児童・生徒が体験を通して知識を獲得する「知る」段階②	言語活動の充実に実を図る「語る」段階	自分の在り方や生き方を考えるキャリア教育としての「愛する」段階	

現在の市内全小中学校の意識調査である。比較調査については、平成19年度の小学校5年生（平成23年度の中学校3年生）の追跡調査と、平成19年度の小学校5年生と平成23年度の小学校5年生との同学年調査を実施した。

その結果が【表3】である。数値は「とても思う」・「思う」と肯定的に回答した児童生徒の割合である。追跡調査では、西都市について「知っている」「人に説明できる」と回答した児童生徒の割合が確実に向上し、「大切である」「何か役に立ちたい」と回答した児童生徒の割合は95%から95%、85%から85%と高い数値を維持している。また、19年度と23年度の同学年比較では、調査4項目全てにおいて向上している。

【表3】比較調査結果（抽出校 妻北小学校・妻中学校）

項目	年度	平成23年度	
		小5(H23中3)	(H23中3) (H23小5)
知っている		68%	88% 91%
人に説明できる		29%	58% 66%
大切である		95%	95% 99%
何か役に立ちたい		85%	85% 94%

次に同じ意識調査を西都市内全小中学校で行った。これは、現在の小中学生がふるさと西都に対してどのような意識をもっているか調査するためである。その結果が【表4】

【表4】意識調査結果（市内全小中学校）

項目	校種	平成23年度	
		小学校5・6年生	中学校
知っている		85%	82%
人に説明できる		62%	57%
大切である		98%	93%
何か役に立ちたい		92%	83%

である。上記の比較調査と同様に「知っている」「大切である」「何か役に立ちたい」については80%以上、「人に説明できる」については50%以上が肯定的に回答している。

イ 意識調査結果からの評価

この結果から、さいと学が郷土を愛する子どもたちを育てることにつながっているかについては、さいと学の取組以前の数値の維持と向上がみられるため、育てることにつながっているものがあると評価できる。また、さいと学学習の流れの妥当性については、比較調査では「知っている」「説明できる」の数値が20%以上の伸びを見せ、現在の市内全小中学校の児童生徒の90%以上が「大切である」と回答していることから、この学習の流れを続けても妥当であると評価できる。

ただ、「説明できる」という項目に関しては、他の項目に対して数値が低いので、この点をさらに向上させる取組を行う必要がある。

(2) デジタルコンテンツ (<http://www.miyazaki-c.ed.jp/saitokkc/index.html>) の充実

ア 昨年度までの取組と本年度を含めた今後の方向性

西都市では平成20年度よりさいと学作業部会を開設し、本研究センターは作業部会と連携し、研究と実践に努めてきた。各年度の進捗状況は【表5】の通りである。この取組は、市内各学校でのさいと学学習がスムーズに行えるようにするためのものである。

昨年度のデジタルコンテンツ作成では、コンテンツのレイアウト作成に加え、小学校5・6年生の資料となるコンテンツと中学校の授業に役立つリンク集を中心に作成した。

【表5】各年度の進捗状況

年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
ねらい	児童生徒用テキスト作成	教師用手引書作成	デジタルコンテンツ作成
本研究センターの役割	作成計画の推進・レイアウトの原案作成 掲載内容の検討		
作業部会の役割	センターより提案された内容の検討・原稿執筆 デジタルデータ作成作業		

【図1】がホームページ形式にしたデジタルコンテンツのトップページである。

デジタルコンテンツはテキストや指導書と違い加筆修正が容易であるというメリットがあり、発展性があるため、昨年度版デジタルコンテンツを更に発展充実させることが、本年度の取組となった。

そして今後、平成25年度までの三年間でさらにコンテンツを充実させ、二年後には、さいと学の基本的なことについては、このデジタルコンテンツで対応できるようにしていく。

イ 小学校のデジタルコンテンツ更新

本年度は、小学校のデジタルコンテンツを充実させるため、二つのことに取り組んだ。一つは5・6年生の昨年度版に新しいコンテンツを加え更新する作業である。もう一つは昨年度までなかった1年生から4年生までのコンテンツを新しく作成することである。

5年生のコンテンツ更新では、【図2】のように「西



【図1】トップページ



【図2】バケツ稲の生長記録

都の米づくりについて知ろう」の学習で参考資料として活用できる「バケツ稲の生長記録」を作成し更新した。

6年生のコンテンツ更新では、【図3】のように「西都の歴史・伝統を知ろう」の学習で体験を通して実感する取組の一例として、「古墳づくりにチャレンジ」の動画を作成した。



【図3】古墳づくりにチャレンジ

小学校1年生から4年生までのデジタルコンテンツ作成は、作業部会と連携し取り組んだ。作業部会では、各小学校の単元構成をデジタルデータ化したもの、実際に活用しているワークシートや画像、プレゼンテーションといったデジタル資料を収集する作業を行った。

各学校で収集したデジタル資料を、本研究センターが集約し、さいと学デジタルコンテンツとして新しく作成した。【図4】がプレゼンテーション資料（以下、プレゼン資料）として作成された小学校3年生デジタルコンテンツの一部である。



【図4】小3ピーマン博士になろう

ウ 中学校のデジタルコンテンツ更新

中学校でも、作業部会と連携し、昨年度作成したデジタルコンテンツ掲載データ一覧表【表6】をもと

【表6】掲載データ一覧表

に、ワークシートや画像、プレゼン資料などのデジタルデータを集約し、中1から中3までのコンテンツを更新した。

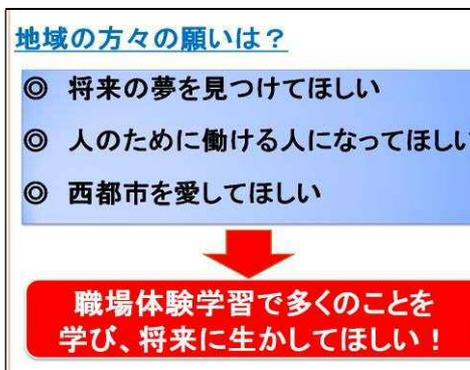
学名	単元名	学習内容	掲載するデータ	掲載ページ	データの形式								
					動画	音声	ワークシート	参考資料	写真	音声	プレゼン	その他	
西都の歴史	伊東マシヨについて	伊東マシヨの肖像画		19,19						写真			
		参考となる映像(LiM6制作)		19									その他
		記録用紙		15				ワークシート					
		画用紙へのまとめ方		16						参考資料	写真		
		発表のしかた(個人・少人数)				動画							
		地域の地図(現在・過去)		17,21,22							参考資料		
		地域のよさ(現在・過去)		17,21						写真			

掲載データ一覧

表のマスの一つずつ埋めていくようにデータを収集することで、資料収集のポイントが絞られ、効率的に資料を収集することができた。【図5】がプレゼン資料として作成された中学校2年生デジタルコンテンツの一部である。

エ 参加型のデジタルコンテンツ作成

各学校がこれまで、さいと学学習のために作成し、集約されたデジタル資料は、他の学校でも活用できるものであった。また、内容も充実しており、西都市の先生方が参加して作り上げることでより良いものができ上がるという「さいと学デジタルコンテンツ作成」の今後の方向性がみえてきた。

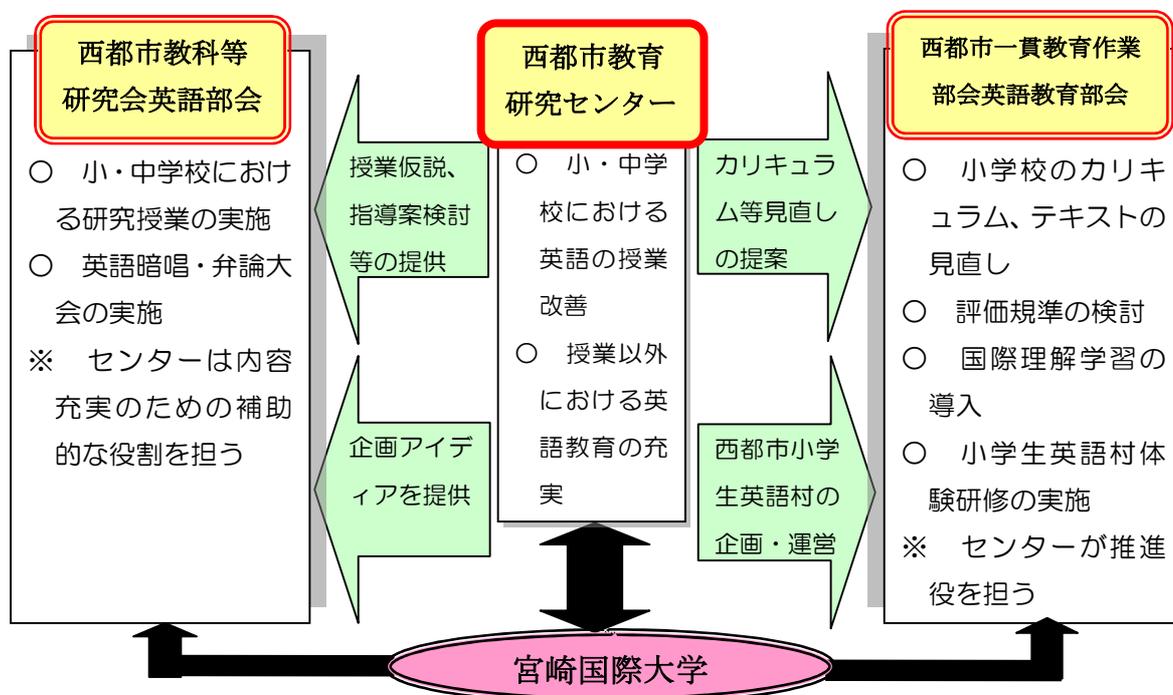


【図5】中2職場体験学習

2 英語教育研究班

(1) 英語教育の充実と組織間の連携・強化

子どもたちの英語によるコミュニケーション能力の育成を目指すために、「西都市教科等研究会英語部会」、「西都市一貫教育作業部会英語教育部会」のパイプ役として、研究センター英語教育研究班がその企画、運営等を担うことにした。また、昨年7月に西都市と連携協定を結んだ宮崎国際大学とも緊密な連携が図られ、本市英語教育の充実が図られた。



【図1】西都市英語教育の充実と組織間の連携・強化関連図

(2) 授業改善と授業力向上

ア 英会話科における「読む・書く」活動の導入

(ア) 昨年度までの取組

昨年度、6年生児童を対象に英会話科に関するアンケートを実施した。その結果、英語の授業で取り組みたいことに文字を「読むこと」「書くこと」を選択した児童が約50%いることがわかった。「英語を学びたい」という子どもたちの思いを中学校での学習につなぐことを目的に、英語活動・英会話科において、一部「読む・書く」活動を取り入れ、全体計画の見直し及び一単位時間の学習の流れの修正を行った。

活動内容	指導上の留意点
Greetings あいさつ	学習状況にあわせて、少しずつ質問項目を増やしていく。
Warm up ウォーミングアップ	雰囲気づくり。 体を動かしながら、前時の学習を思い出したり、これまでの学習内容に繰り返し触れさせたりする。 発音とつづりに関することや文字を書く練習も取り入れる。
Introduction 目標表現の導入	絵カードや実演で、学習する言語材料に触れさせる。

【図2】一単位時間の学習の流れ（一部）

(イ) 授業実践

中学校英語科への緩やかな接続と「書く」ことへの抵抗を軽減するために、小学校5・6年生の英会話科においてモニター校を指定し、アルファベットを「読む・書く」活動を

取り入れた。書く活動に充てる時間は5分以内の短い時間に設定した。テストや評価等を行わず、主たる目的は、従来どおり「聞く・話す」活動を中心にした英語によるコミュニケーションを楽しむことに変わりはない。



【写真1】アルファベットを「書く」様子

【児童の感想より】

- これまでなんとなく知っていたことをはっきりと教えてもらえてうれしかった。
- 新しいことを覚えられてうれしかった。
- アルファベットは、順番には言えるけれど、一つだけ見せられたら、言えないので、もっと言えるようになりたいです。

(ウ) 検証

- アルファベットを「読む・書く」活動を通して、児童の文字に対する興味、知的好奇心を高めることができた。
- 発音とつづりに関連付けてアルファベットを学習したことで、文字を「話す」ことへの興味を高めることができた。
- アルファベットを「読む・書く」活動が、児童にとって負担にならないように学習活動を工夫していく必要がある。

イ 中学校英語科における授業の改善

(ア) 研究授業の取組

昨年度のアンケート結果より、児童の中には文字に対する興味が芽生えていることが窺えた一方で、中学1年生では、小学校の英会話科と中学校の英語科とのギャップに戸惑う生徒も見られるという報告も上がった。そこで、「小学校での英語活動・英会話科の学びを中学校英語科へ緩やかに接続する」ための授業改善という視点で、小・中学校英語担当者参加のもと、中学校1年生での研究授業を実施した。

(イ) 授業の実際

段階	主な学習活動	教師の支援・援助	学習種
導入 つかむ	1 英語であいさつをする。	○ あいさつや天気などの簡単な会話を して英語学習の雰囲気を作らせる。	一斉
	2 英文練習で現在形を復習する。	○ 発音と綴りを意識させながら練習 させる。	ペア
	3 本時の学習課題をつかむ。	○ 身近な話題に触れながら新文型を 導入し、意味を考えさせる。	一斉
過去にしたことについて話そう。			
考える	4 新文構造の口頭練習をする。	○ 大きな声で意味を確認しながら練習 させる。	一斉 個人
	5 板書で文法事項を確認する。	○ 主語が何であつて何をするか を練習させる。	一斉
展開 深める	6 新文構造の練習問題に取り組み、会話文をペアで発表する。	○ 意味、過去形の綴り、発音を確認 させる。 ○ 声を出して練習させ、暗唱できるように 促す。	個人 ペア
	7 自分のことを話す。 ・カレンダーを使って自分がしたことを 考え、ペアで発表する。	○ 振り返り、考えさせさせる。 ○ ペアで協力して練習させる。	個人 ペア
まとめ 週末	8 学習のまとめをする。 ・板書事項をノートに写し、シールを 貼る。	○ 正しく書けているか確認させる。 ○ 早く終わった生徒には追加の課題 を出す。	個人
	9 学習内容の確認をする。	○ 大きな声で言わせる。	一斉
	10 あいさつをする。		

導入で、小学校で行っていたあいさつや天気等の日常会話を取り入れ、和やかな雰囲気での学習がスタートできていた。



【写真2】

小学校でも取り入れているピクチャーカードを使った練習



【写真3】

ペアで楽しく助け合い、認め合いながら、過去形の文をつくり、声に出して練習している様子

【図3】小中の接続を意識した学習指導過程

(ウ) 検証

- 小学校で培ったコミュニケーション能力の素地を生かす場や表現を生かす場の工夫が意図的・計画的に設定されており、生徒は既習内容を想起しながら自信をもって活動に取り組んでいた。
- 生徒同士が助け合い、認め合う活動を授業の中に生かす工夫がされており、ペア学習に生き生きと取り組んでいた。
- 今後は、全体に向けて、一斉に行ってきたあいさつを発展させ、様々なあいさつや会話の場面を設定しながら一人一人の思いや考えを表現できるよう学習形態を工夫していく必要がある。

(3) 小学校英語教育のカリキュラムの見直し

ア 実態把握

本市英語教育のさらなる充実を目的に、一貫教育作業部会と連携を図りながら、小学校における英語教育のカリキュラムの見直しや評価規準の検討を行った。各校の英語担当の教諭を対象に実施したアンケートの結果から明らかになった課題は、次の二点である。

- 学年の実態に対して学習内容が多すぎるため、西都市独自の英語活動や英会話科の目標を踏まえた上で内容を再検討する必要がある。
- 評価に対する考え方や取組が学校ごとに異なっているので、評価規準、評価基準をはっきりとさせる必要がある。

本年度は、上記の二つの課題を解決するために、本市の小学校全体で目指すべき英語教育の指針について検討した。今後は、平成20年度に作成された『西都市英語活動展開事例集』の評価規準、評価基準についても見直し、市内のすべての学校で共通実践していく必要がある。

(4) 授業以外における英語教育の充実

ア 西都市小学生英語村体験研修

夏休みを利用して、小学校6年生を対象に、英語によるコミュニケーション活動を通して異国の文化を学ぶ「西都市小学生英語村」を宮崎国際大学で行った。児童は、手作りのパスポートを手に、入国審査を体験したあと、大学生をリーダーにしたグループに分かれ、アメリカやイギリス、ワークショップをまわり、英会話や歌、ゲーム等を介して国際理解を深めた。参加した児童からは「もっと英語が話せるようになりたい」という今後の意欲につながる感想が聞かれた。



【写真4】西都市小学生英語村の様子

イ 中学校英語暗唱・弁論大会

生徒の表現力向上と大会への参加意欲の高揚をねらい、中学校教科等研究会主催の「英語暗唱・弁論大会」の様子をビデオに撮影し、各学校における指導への活用を図ることにした。

今後はこのデータを次年度の指導に役立てるよう、活用を工夫していく。



【写真5】英語暗唱・弁論大会の様子

3 学力向上研究班

主題設定の理由で述べたとおり、本市の一貫教育は「郷土に対する誇りと国際感覚にあふれ、新たな時代を切り拓いていく気概をもった子どもの育成」を目指している。その実現には、将来に向けて生きてはたらく確かな学力の定着が不可欠である。本センターでは、本年度、新たに学力向上研究班を設置し、確かな学力の定着に向けた実践的な研究に取り組んできた。

【本研究が目指す学力】

研究実践を進めるに当たり、学習指導要領の基本的な考え方にに基づき、本研究が目指す学力について次のとおり確認した。

- ① 基礎的な知識及び技能
- ② ①を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等
- ③ 主体的に学習に取り組む態度

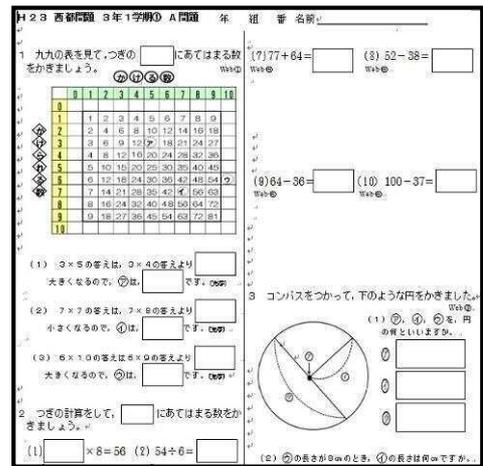
(1) Web 学習単元評価システムと連動した取組

県教委が作成したWeb 学習単元評価システム（以下、システム）は、単元ごとの学習状況を把握するための評価問題がWeb 上から自由にダウンロードできる学習支援教材である。

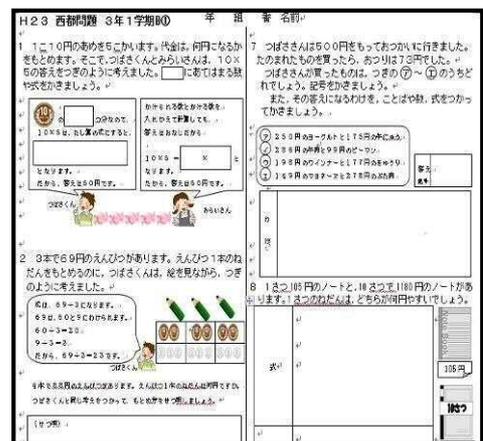
本研究班では、日常におけるシステムの活用に加え、学期末の学習状況の評価と習熟にシステムと連動した取組ができないか検討を重ねた。その結果、システムの各単元の評価問題から、基礎基本を問うA問題を集めた「西都A問題」

【図1】と、活用する力を問うB問題を集めた「西都B問題」【図2】をそれぞれ学期ごとに作成することにした。これにより、各単元ごとの学習状況はシステムで、学期末の学習状況は「西都A問題」「西都B問題」を児童生徒の実態に応じて使い分けることでそれぞれ評価できるようにした。

また、「西都問題」の各問題に“web-〇”の記号を付け、システムの評価問題との関連を示した。さらに、「西都問題」を本センターのホームページから自由にダウンロードできるようにし、活用促進を図った。【図3】これにより、学校だけでなく家庭学習においても児童生徒自らが、どこでつまづいているかを振り返り、効果的に復習や反復練習ができるようにした。



【図1】西都問題3年1学期A問題



【図2】西都問題3年1学期B問題

TOP				
学習の部屋				
算数・数学コーナー				
この問題は、各学年の基礎的・基本的問題を学期ごとに1枚のプリントにまとめたものです。				
	A問題	1学期	2学期	3学期
小学1年生	問題① 問題①解答			
小学2年生	問題① 問題①解答			
小学3年生	問題① 問題①解答			

【図3】西都市教育研究センター HP

<http://www.miyazaki-c.ed.jp/saitokkc/index.ht>

また、この「西都問題」を仮称「西都テスト」として位置付け、計画的に活用することで児童生徒の学習意欲を高め、学力の向上を目指す計画【図4】を次のように考えた。

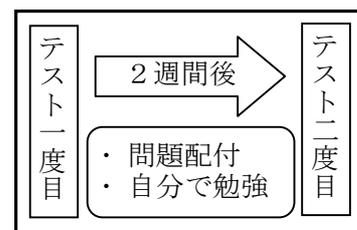
- (1) 目的 西都市の児童生徒の学力の状況を把握するとともに、児童生徒の学習意欲を高め、学力の向上を目指す。
- (2) 対象 西都市内の小中学校で希望する学校
- (3) 方法

テスト時期	7月 第2週～第3週	12月 第2週～第3週	3月 第2週～第3週
テスト内容	該当学年の4～6月	該当学年の6～11月	該当学年の11～2月
方法	1 類似問題を事前に研究センターのホームページにアップし、評価、習熟を図る。 2 実施時期に類似の新しい問題をホームページにアップし、各学校でダウンロードし、テストを行う。 3 各学級等で採点し、100点をとった児童生徒の割合を学級・学年ごとに集め、研究員に報告する。 4 市内全体の100点をとった児童生徒の習得率を算出する。		

【図4】 仮称 西都テスト実施計画

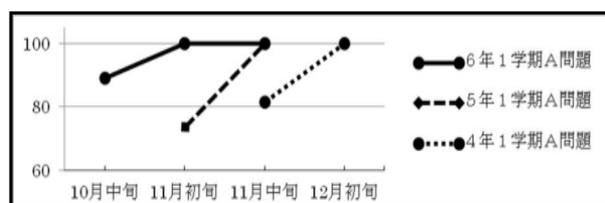
【図4】の計画をもとに、西都市内の小学校の6年児童1クラスを対象に、西都問題を活用した児童の学習状況の評価と習熟テストを行った。テストは、朝の業前活動20分の中の、15分テスト、2分丸付け、3分やり直しの方法で行った。

問題作成後の10月・11月に【図5】のように実践した。一度目のテストの後、問題と解答を配付し、家庭学習に活用できるようにするとともに、問題を学級のプリント棚に用意しておき、自主的にテストを受けて提出してもよいこととした。100点をとれなかった児童は、家庭学習で勉強し、次の日の登校後や休み時間に自主的に問題を解き、自己採点して教師に提出した。また、分からない問題を自主的に聞きに来る児童もいた。2週間後同じプリントでテストを行った。



【図5】 10・11月の実践計画

6年1学期のテスト後、5年1学期のテストを行うと、学級の平均は73.9点であった。同じようにして、2週間後にテストすると、学級の平均は100点になった。



【グラフ1】

さらに、4年1学期のテストを行うと、学級の平均は81.6点から100点になった。その結果を示したのが、【グラフ1】である。

グラフでは、学級の平均を示してあるが、児童一人一人の得点の散らばりはとても大きかった。この問題により、前学年までのどの基礎的・基本的内容が定着していないのか短時間に評価することができた。また、短時間で実施できるため、児童も取り組みやすく、自主的に問題を解いて100点を取り、自信をつける児童も多く見られた。

(2) 漢字指導のための教材開発

西都市では、小学校4年生から6年生までの全児童が漢字検定を受検する。しかし、漢字検定の問題は、漢字ドリルなどによる指導だけでは不十分である。そこで、児童が楽しみながら漢字の面白さに気付いたり、習熟したりするためのホームページのリンク集を作成した。今後、活用を図っていききたい。

VI 成果と課題

1 成果

- 「さいと学研究班」
 - ・ 意識調査をもとに、平成20年度からの三年間の取組について検証することができた。
 - ・ 平成23年度の西都市全小中学校の意識調査を実施したことで、今後の調査における比較資料が整った。
 - ・ 作業部会との連携で、参加型のデジタルコンテンツ作成に取り組めた。
- 「英語教育研究班」
 - ・ 小学校英会話科におけるアルファベットを「読む・書く」活動の導入を通して、児童の文字に対する興味、知的好奇心が高まり、中学校英語科へ緩やかに接続する道筋が立った。
 - ・ 「小学生英語村体験研修」において、宮崎国際大学と連携し、本市の6年生にネイティブとの交流と国際人として活躍する人材を育成する異文化理解の場を提供することで、児童の英語への理解と関心が一層高まった。
- 「学力向上研究班」
 - ・ Web学習単元評価システムと連動した問題を作成・活用したことで、適正な学力の状況把握ができ、より個に応じた指導が可能となった。また、家庭学習にも活用の幅を広げることで、児童生徒の主体的学習の促進にもつながった。

2 課題

- 「さいと学研究班」
 - ・ デジタルコンテンツが具体的にどのように各学校で活用されているか調査することで、コンテンツの有効性を検証していく。
- 「英語教育研究班」
 - ・ コミュニケーション能力の育成のために、授業において児童生徒一人一人の思いや考えを一層表現できるような学習活動や学習形態の工夫・改善を図っていく。
- 「学力向上研究班」
 - ・ モデル的取組から市内小中学校の共通的な取組として推進を図っていく。

○ 研究同人

所 長	綾 寛光 (教育長)
主任研究員	日高 伸 (妻南小学校)
研 究 員	
さいと学研究班	
松浦 寿人 (三財小学校)	田口 正子 (妻北小学校) 木下 浩利 (妻南小学校)
須本 康仁 (三納小学校)	川本 祥文 (都於郡中学校)
英語教育研究班	
瀬之口忠二 (茶臼原小学校)	法元 良子 (妻北小学校) 下川奈緒子 (穂北中学校)
東 絵美 (三納中学校)	志岐 明奈 (三財中学校)
学力向上研究班	
水田 幸児 (妻北小学校)	日高誠一郎 (穂北小学校) 吉野 達三 (都於郡小学校)
壺岐 孝平 (妻中学校)	
主 事	明松 伸浩 (学校教育課係長) 事 務 黒木真由子 (学校教育課)